



P.I.E.GROUP.SANDA パイグループさんだ News Letter Vol.7

ピックアップカラー：ゴールド
9月は「世界小児がん啓発月間」です。小児がんは、15歳未満の子どもが発症するがんで、日本では1年間にがんと診断されるがんの数は小児で約2,100例と推計される。



地域コミュニティの健康福祉向上を目的とし、病気の予防(Prevention)、介入(Intervention)、教育(Education)を提案する情報誌

「心の健康」とは何か？ 相模原障害者殺傷事件が問いかけていること

1. はじめに

今から5年前の2016年7月26日、一つの事件が起きました。同日未明、かつて自分が働いていた障害者施設に侵入した一人の青年(以降Uと表記)が、重度障害者のみを狙い19名の命を奪った事件、いわゆる相模原障害者殺傷事件です。今年3月31日に死刑が確定したことで、法的には一応決着がついたと言えるでしょう。

しかし、その決着はあくまでも法的なレベルにおいてだけであって、本当の意味では何の決着もついていないことは看過されてはなりません。というのも、「障害者は不幸を作ることしかできない」という考えに基づきこの事件を起こした人間を社会から法的に排除・抹殺して事足り、というのでは、この事件が私たち一人ひとりに問いかけていることとは一体何なのか、ということが不問に付されままだからです。このことが問い返されないかぎり、この事件に決着がついたとは到底言えません。

こうしたことを踏まえ、次節では、この不問に付されたままの問いを浮き彫りにし、誰もが「社会的に役立たない＝生きる意味がない」という考えを抱いてしまっていることを明らかにしていきます。そして次々節では、こうした考えに絶えず批判的に立ち向かうところにこそ、自他のあるがままを認めることができる「健康な心」が萌してくるのではないのかということを示します。



ない」という考えは、「全人類が心の隅に隠した想い」であると述べています。また彼は裁判のなかで、この「不幸」とは、重度障害者たちが自分たちの家族と社会から「金と時間を奪っている」点に、つまり「人の役に立っていない」(＝生産性がない)点にあるとし、したがってそのような「心失者(しんしつしゃ)」「(彼の造語)たちをこの世からなくすために自分は犯行に及んだ」という旨の発言もしています。このことも見落としてはなりません。いずれにせよ、彼によれば、「社会的に役に立たない＝生きる意味がない」という考えは誰もが心のなかに抱いているものであり、自分はその考えに基づき、いわば「善悪」から実行したに過ぎない、というのです。

これを読んで下さっている方のほとんどは、こうした彼の発言を見るにつけ、「何て偏った考えなんだ！ このような考えは完全に間違っている！」と思うことでしょう。この思いは一見するとあまりに自然かつ人間的であるがゆえに、それ以上問われることは、普通はないでしょう。しかし私たちはここで一度立ち止まり、この思いそのものを根本から疑い、私たちは本当にそのように考えているのかを自分自身に問いかけてみる必要があります。このことの必要性を考える上で、重度障害児を我が子として持ち、その我が子とこの事件の裁判に四回足を運んだ、一人の父親の発言は示唆的です。彼は次のように述べています。「恐怖を覚えても、『社会の役に立つ』と思って凶行に及んだU〔本文では、犯行に及んだ者の苗字が明記：筆者註〕を突き放すことができない自分がある。荘真〔＝子供の名前：筆者註〕と一緒にあるがまま生きたいと願うが、誰かに何らかの影響を与える何者かでありたいという思いがつかまとう。そんな自分自身とUを重ねた。『やったことは許されないが、彼は自分に自信が持てず、自他共に認める何者かになりたかったのではないか。あるがままの自分を認めて生きることが、



2. 誰もが持っている「心の内なる差別意識」

この事件が問いかけていることは何なのかを考える上で、Uが事件を起こす約半年前に衆議院議長に宛てた手紙の内容を確認することが重要になってきます。そのなかで、Uは重度「障害者は不幸を作ることしかでき

なぜできなかったのだろうか』(『やまゆり園事件』、329-330頁)。

父親は荘真くんを介護し、家計を担っている妻と女兒二人の生活を支えるために主夫になる道を選んだのですが、そこに抵抗感はなかったそうです(同書、322-326頁参照)。それだけに、その彼の「Uを突き放すことができない自分がある」という発言は衝撃的です。「社会的に役に立たない＝生きる意味がない」というUの考えによれば、荘真くんは明らかに殺される側にいます。だからこそ、この父親なら「Uの考えは非人間的で完全に間違っている」と発言してくれるであろうと、反射的に期待してしまっている私たちがいるのではないのでしょうか。そして「よくぞ言ってくれた!」、と。ところが、父親の発言は私たちの期待を完全に裏切るものでした。父親がUを突き放せずにいる理由はどこにあるのか。それは、この父親がUと全く同じ考えを実は自分も抱えていることを自覚しているからです。このことは、「誰かに何らかの影響を与える何者かでありたいという思いがつきまとう」という発言にはっきりと現れています。すなわち、父親は一方では、我が子とその彼を支える自分の「あるがまま」を認めながら生きていと切に願いつつも、他方ではUと全く同じく、「社会的に役に立つことが重要である」という思いから完全には脱し切れず、自分たちの「あるがまま」を認めることができないがゆえに、Uを完全に否定し切れずにいるのです。

さて、この父親の発言を受けて私たちがなすべきは、「Uの考えはそれほど常軌を逸したもののなかか」ということを、自分の胸に手を当てながら自問することです。すると、私たち一人ひとりの心のなかにも「内なるU」が潜んでいるのではないかという疑いが生じてくるのではないのでしょうか。1970年代に日本の障害者運動を牽引し、自身も重度の脳性麻痺者であった横田弘(1933-2013)は、この「心の内なる疎外—差別意識」(＝内なるU)こそがすべての差別問題の元凶であると喝破し、それは障害者・非障害者問わず、誰の心にも(当然、横田自身の心にも)巣食うものであることを剔出しました(『障害者殺しの思想』、53頁参照)。したがって、「社会的に役に立たない＝生きる意味がない」という考えを「全人類が心の隅に隠した思い」だとするUの見解は、それだけを取れば、皮肉にも正鵠を射ていることになります。

かく言う私自身はどうかと言えば、衆議院議長に宛てた彼の手紙や裁判記録を初めて読んだ時に、思わずグクリとしたことを今でも鮮明に覚えています。それは、私自身の心のなかにもUと同じ考えが巣食っていることに



改めて気づかされたからです。愚痴をこぼしながらも、働くことができている(＝生産性のあることをしている)ことに自分の存在意義を認めているところに差別的な思いがあることを彼の発言によって照らされ、それで何とも言えない「居心地の悪さ」を感じたのです。作家の辺見庸はこの事件を扱った小説のなかで、登場人物の一人に次のように語らせ、私たちの「善意」の残酷さを暴露しています。「まったく“心失者”とはよくもいったものだ。だが、それは園の入所者たちではなく、口先でいかにもかれらかのじよらに同情するふりをして、そのじつ全面的効率社会をいわば自動的にささえているところなきシステムと“善き市民”たちのことじゃないか」(『月』、261頁)。

この事件の原因をUの特異な性格にだけ還元することは許されません。というのも、その本当の原因は、全面的効率社会と、そこから漏れ落ちてしまった者に落伍者の烙印を押すことで自己を肯定しようとする私たちのあり方そのものにあると考えられるからです。



3. 自他の「あるがまま」を認めて生きる： 「意味—無意味」の彼方へ

私たちは「意味」を考えずには生きていくことなどできません。例えば、中学・高校で一生懸命勉強することに意味があるのは、それが自分の目標とする大学の入学試験に合格するために必要なことだからです。あるいは、大学で要領よく単位を取得することに意味があるのは、就職活動を円滑かつ優位に運ぶために必要なことだからです。このように、私たちは自分の個々の行動を常に「意味—無意味」の枠組みのなかで価値づけながら生きています。ただ問われるべきは、こうした価値づけを「生きてしまっている事実」にまで適用することが果たして正当であるかどうかです。この問いに対して、批評家の杉田俊介はある論文で、明確に次のように答えてくれています。「『障害者だろうが、健全者だろうが、優れた人間だろうが何だろうが、人間の生には平等に意味がない(生存という事実は、端的に非意味でしかない)』と言わねばならない。僕らはむしろ、誰にとっても平等な、そうした圧倒的な非意味＝ノンセンスこそ、耐えねばならないのではなかったか」(「優生は誰を殺すのか：相模原障害者殺傷事件について」、124頁)。

この事件の後、「どれほど重度の障害者の生にも意味がある」という主張は、人口に膾炙しています。しかし杉田はこのようなことを主張したいわけでは決してありま

せん。なぜならこうした主張そのものが、「意味—無意味」の枠組みをすでに前提としたものだからです(同論文、同頁参照)。杉田の主張の力点は、先の発言に示されているように、「生存という事実」を「意味—無意味」の枠組みのなかで価値づけしようとするそのものが非・意味、つまりナンセンスだということにあります。何かの意味や根拠があって、私たちはこの世に生を享けたわけではありません。何の意味や根拠もなく、この世にいつの間にか誕生せられ、気づいたときにはすでに生きてしまっている。つまり、私たちの生の事実は無根拠の上に成立しているのであって、どこまでも謎めいたものなのです。それにもかかわらず、このことを忘れ、本来無根拠な生の事実そのものを「意味—無意味」の枠組みのなかで価値づけようとするところに、そもそも無理が、そして多大な暴力性があるのではないのでしょうか。



さて、以上のことを頭のなかでは理解し(たつもりになっ)たとして、さりとして、意味的な価値づけから完全に自由になって生きることは容易いことではありません。さらに言えば、そのような完全な自由などどこにもない、というのが実情かもしれません。なぜなら、「社会的に役に立たない＝生きる意味がない」という私たちの心のなかの差別意識は、焦げのようにこびりついて、完全に洗い落とすことができないものだからです(「誰かに何らかの影響を与える何者かでありたいという思いがつかまとう」という先の父親の発言にある、「つかまとう」がこのことをありありと物語っています)。そして、日本社会がこれからさらに有用性と効率性を求めていくなれば、この差別意識はより一層私たちの心にこびりつき、生存という事実そのものがますます忘れ去られていくやもしれません。しかし、そのような動向のなかでも自分の心に巣食う差別意識と対峙し続け、生きてしまっている事実そのものについて、「もう何もかも本当に分からない」という地点に至ることこそが大切なことだと思います。というのも、その時に初めて自他のあるがままを認める道が開かれてくるかもしれないからです。自身も重度障害の子どもを持つ最首悟の次の言葉(Uに送った手紙の文面)はこの実情を鮮やかに物語っています。「わからないからわかりたい、でも一つわかるといくつもわからないことが増えているのに気づく。すると、しまいにはわから

ないことだらけに成りはしないか。そうです。人にはどんなにしても、決してわからないことがある。そのことが腑に落ちると、人は穏やかなやさしさに包まれるのではないか」(『こんなときだから 希望は胸に高鳴っている:あなたとわたし・わたしとあなたの関係への覚えがき』、82頁)。

最後に、この論稿で明らかになったことを四点列挙します。(1) 私たち一人ひとりがこの全面的効率社会を支え、社会的弱者の排除にいつしか加担してしまっている「心失者」であること、(2) その加害者性を徹底して自覚すること、(3) その自覚のもとで、生きている事実そのものにその都度立ち返り、「意味—無意味」の枠組みにおける価値づけを否定し続けること、(4) それにより、自他の「あるがまま」を認めることが初めて可能となるやもしれないこと。私は、全面的効率社会のなかでこの四つのことを愚直にやり続ける心を〈健康な心〉と名づけたい。そして、私たちのなかにこの心が萌してきた時、この事件を本当の意味で決着させるためのスタートラインにようやく着いたと言えるのではないかと考えているのです。

参考文献

- ・神奈川新聞取材班『やまゆり園事件』、幻冬社、2020年
- ・最首悟『こんなときだから 希望は胸に高鳴っている:あなたとわたし・わたしとあなたの関係への覚えがき』、くんぷる、2019年
- ・杉田俊介「優生は誰を殺すのか:相模原障害者殺傷事件について」、『現代思想』10 vol.44-19所収、青土社、2016年
- ・辺見庸『月』、角川書店、2018年
- ・横田弘『【増補新装版】障害者殺しの思想』、現代書館、2015年

著:西章(沖縄大学人文学部/哲学・倫理学教員)



- イラストは、すべて「かわいいフリー素材集いらすとや」(<https://www.irasutoya.com/>)を使用させていただきました。
 - P.I.E.GROUP.SANDAのイベント情報や病気予防や健康に関する情報を発信しています。フォローよろしくお願いします。
- アメーバブログ <https://ameblo.jp/piegroupsanda>
Twitter [@piegroupsanda](https://twitter.com/piegroupsanda)
Facebook <https://www.facebook.com/npopiegroupsanda/>

編集後記

P.I.E.GROUP.SANDAでは、2019年末から、毎月一回のペースで定期的にキャンサー・ピアサポートの会を開催しています。この集まりには、現在進行形でがん向き合っておられる方や、また過去に罹ったことのある方がおいでになられ、ご家庭や職場、また病院では話せないことを気軽に話し合い、また聴き合うひとときを共にしております。そこでは、ご自身の病の体験のなかで、どのような人に出会い、どのように関わったのか、また考え方や感じ方はどのような変化したのか、生き方や、また人生の閉じ方について自分なりに自由にお話されます。

私がいつも不思議に思うことは、わざわざ休みの日に出かけてきて、何の見返りもないのに、話をして、話を聴くということが、この空間でなされていることです。もし、私たちが自分の苦しみは、自分だけのものという「特権的な意識」のもとに捉えられているのであれば、私たちはわざわざ相手の苦しみに相槌を打つようなことはしないのではないかと思えます。相手の苦しみに耳を傾けて、それを柔らかく受け止め、寄り添おうとすることは、

いみじくも、西会員がお書きになっているように、生産的で効率的な仕方で社会の役に立つ人間のあり方とは対極的な生き方ではないでしょうか。


そう言いながら、私たちはどこかで、社会の役に立たなければ存在価値はないと感じていることも否定できません。だから、私たちは、がんになり(がんだけでなく他の病も同様)、働けなくなるとそれだけで存在価値がないと思込んでしまい、自分の苦しみを増幅させてしまうこともあるのではないのでしょうか。もちろん、この問題は、個人では如何ともし難い、そうあらなければならないと思込ませてくる社会の問題でもあります。だからこそ、私たちは、一人ひとりの語りに丁寧に耳を傾ける必要があるのではないのでしょうか。西会員のお言葉には、題材の深い奥行と、ピアサポートの基本的な考え方へと導いてくださる魅力があるのではないかと、私は思います。「苦しくても、生きとりやええじゃないか」と心の底から笑い合え、互いを認め合える社会が実現するとよいですね。

NPO法人P.I.E.GROUP.SANDA 理事長 西澤真則

●このニューズレターは、下記企業の協賛支援により制作・発行しています。



澤外科 外科・内科・消化器内科
SAWA CLINIC
神戸電鉄 三田本町駅より徒歩 約10分
079-563-2713
〒669-1532 兵庫県三田市屋敷町17-4



住み慣れた地域で
安心して暮らしたい
さんだ在宅医療ネットワーク
TEL:079-563-8120 FAX:079-563-8121
(事務局は訪問看護ステーションつな樹内にあります)

Hair's
Curar
beauty produce
三田市中央町9-38 ユマニティビル202 ☎0120-158-700






エリスメディカル
o2booking@ellismedical.jp
080-7884-1826
栄養 運動 トリートメント 高気圧酸素カプセル

有限会社美除貞石材 TEL & FAX 079-562-2835
お墓のことならお任せください。
あらゆる石工事のご相談から設計・施工まで行っております。
事業内容
■墓石工事の設計及び施工
■石灯笼、石材加工及び販売
■記念碑及びモニュメントなど、石工事の設計施工
■霊園の紹介 ■お墓の引越し ■お墓の撤去
神戸電鉄三田線 横山駅より徒歩約7分
三田市南が丘1丁目5-4 (北摂ニュータウン南入り口)

English Cafe SANDA
イングリッシュカフェサンダ
ネイティブ講師と英会話生徒募集
入会年会費無料 三田駅前徒歩2分
Let's Study ENGLISH
やさしい英会話 TOEIC Listening Reading 旅行英会話 医療英会話 英検1次試験2次試験対策

心泉整体
弾力のある背骨を取り戻す!
☎ 079-558-7018 http://shinsen-seitai.com/

小論文・読書感想文は青山舎へ
言葉は生きる力の源 070-5500-0926 seizansya@gmail.com
問う力を養う たくさん読む わかるまで待つ 書けるとうれしい!
指導歴19年の現役高校講師が特別な支援を必要とする子どもへの国語教育、大学・大学院入試、編入試験、就職試験に対応します。お気軽にご相談ください。